論説 1

大友義鎮の弘治・永禄年間における外交姿勢について

——アルメイダ修道士によるマカオ貿易参加——

成田勝

一

一五四九年（天文一八年）八月、フランシスコ・ザビエル師とともに鹿児島に上陸したコスメ・デ・トルレス司祭は、平戸山口を経て一五五六年（弘治二年）五月はじめ豊後府内を訪れ、大友義鎮の援助[1]をうけながら、風俗、習慣のちがいや仏教側からの圧迫など多くの苦難のなかにあって、六年間にわたる布教活動に精励した。その後同司祭は、再び豊後に帰ってくることなく、肥前の横瀬浦[2]、平戸、口之津[3]などポルトガル船の入港地で働き、その間一五六三年（永禄六年）には大村純忠に授洗した。

一五六八年（永禄一一年）一月、トルレス司祭はルイス・デ・アルメイダ修道士[4]を口之津にのこし、ミゲル・ヴァス修道士[5]とともに天草の志岐[6]にやってきた。なおこのときトルレス司祭とともに、ポルトガル人のベルトラメオ・デ・グヴィア、バルテザール・ガムボア、ゴンサロ・フアルカン、アンドレ・ソアレスがいた。そして志岐にはすでに福田[7]に入港していた総司令官（カピタン・モール）アントニオ・デ・ソウザがやってきていた。一同が顔を揃えたとき、豊後からは国主（大友義鎮）の管財人（フェイトール）（貿易担当）で

あるフランシスコ・フェレイラと御用商人達（メルカドール・スエナ）および別当殿が加わった。このときの商談で「硝石と大砲」についての交渉が行なわれたことは確実である。商談が終ってのち、ミゲル・ヴアス修道士だけが志岐にのこり、トルレス司祭とともに全員が福田に赴き、現地の住民から長崎湾の状況について説明をうけた。[8] 説明をきいたのはフェルナン・レモス、バルテザール・ガムボア、ペルトラメオ・デ・グヴィア、アントニオ・ダ・コスタ、異教徒（ゼンテイル）のバルテザールであった。その後一同は「大きな樹々の生えている長崎」に足を運び、「ベルナルド」と呼ばれる場所にあるトードス・オス・サントス教会にヴィレラ司祭を訪ね、さらに大村にドン・ペルトラメオ（大村純忠）を訪問、大村ではサンカンという名の支那人の家に十五日間滞在、引続き純忠はイエズス会士およびポルトガル人関係者全員を宴会に招待している。[9] この大村での会議で長崎開港が決定した。一五六八年（永禄一一年）七月のことではなかったろうか。

このことはさておいて、豊後についていえば、前年大友義鎮からニケア司教ドン・ペルヒオール・カルネイロあての書翰[10]で要望していた良質の硝石二百斤[11]を受け取ること、さらに大砲（ユンペラ）を送ってほしいとする別件の交渉があった。その重要であったことは、豊後にいたポルトガルの商人達に加えて「別当殿」が参加しているところもうかがえるのである。

「硝石と大砲」についての貿易交渉は、その後マカオ貿易の一般的なパターンとなった支那の絹と日本の銀を似てする商業ベースのそれではなく、政治ベースのものであったから、ポルトガルとの政治的接触が欠かせないものであった。

カルネイロ司教あての書翰のなかに「貴下（司教）が（インド）総督に書翰を贈りて、予（義鎮）が大砲の贈与を受くる資格あることを通知せられんことを希望す。[12]」とあり、さらに「予（義鎮）もし領国を防禦し、これを繁栄ならしむるを得ば、領内のデウスの会堂、パードレおよびキリシタン等、ならびに当地に来るポルトガル人一同もまた然るべし[13]」とあることに注目したい。義鎮はまだ洗礼をうけていないから、ここでいう「資格」とは、ザビエル師豊後訪問以来のイエズス会に対する布教許可、便宜供与、援助などの実績をふまえてのものであることはいうまでもない。さらに「硝石」についていえば、「百タイスまたは貴下（カルネイロ司教）が指定せられる金額」の支払いを申し出ており、[14] 商業ベースを越えた政治的要求であった

このように大友義鎮の対ポルトガル外交は永禄年間の一時期、イエズス会を仲介者としてポルトガルと四つに取り組んだ卒直で主導的な展開をみせたのである。この点大村純忠がいち早く改宗し、専ら貿易による利益を求め、ポルトガル側にとって一方的に有利な条件のもとに、領内の横瀬浦、さらには長崎の開港へと受身で終始したのとは大きく異っていたといわなければならない。

さて長崎の開港が外交的に決定したのはさきにも述べたように一五六八年（永禄一一年）であったが、現実にマカオからの定航船[15]（総司令官トリスタン・ヴアス・デ・ヴェイガ）がはじめて来航したのは、三年後の一五七一年（元亀二年）のことであった。以後は一五七九年（天正七年、総司令官リオネル・デ・ブリトー、口之津）および来航のなかった年[16]を除き、一六四〇年（寛永一七年、総司令官ルイス・パエス・パチェコ）まで年々の定航船は長崎をターミナルとした。

しかしこれより先、長崎開港にいたるまでには、一五六二年（永禄五年）以後、横瀬浦に二回、松浦領の平戸に一回、有馬領の口之津に一回、大村領で長崎の外港にあたる福田に五回来航している。いずれも東支那海の波に洗はれる港であるが、時代を一五五〇年代、天文の頃にまでさかのぼると、雲煙万里の波濤をけって、豊後水道を北上するポルトガル船の雄姿が見られたのである。府内および豊後への来航である。このうち記録に明らかなものは四回で、つぎにこれらポルトガル船の豊後来航についてふれてみたい。

註（1）一五五五年（弘治元年）九月二三日付、平戸からのパードレ・バルテザール・ガゴの書翰（村上直次郎訳「イエズス会士日本通信上」九三頁）、一五六〇年（永禄三年）一月一五日付、コチンからのメルヒオール・ヌーネス・バレト司祭の書翰（シュッテ編「モニュメンタ・ヒストリカ・ヤポニアI」四〇、四一頁）、松田・川崎訳「ルイス・フロイス日本史」第六巻第十四章。

（2）現在、長崎県西彼杵郡西海町横瀬郷。

（3）現在、長崎県南高来郡口之津町。

（4）シュッテ編「前掲書」三八、四二、七六、八九、三九六頁。ヴィッキ編「ドキュメンタ・インディカIII」四四八頁、「同IV」五一二頁

(5) シュッテ編「前掲書」一二六頁。
(6) 現在、熊本県天草郡苓北町志岐。
(7) 現在、長崎市福田本町。
(8) 一六〇五年（慶長一〇年）総司令官として長崎に来航。
(9) シュッテ編「前掲書」三九三頁から三九五頁まで。
(10) 村上直次郎訳「前掲書下」一四七頁。C・R・ボクサー「ザ・グレイトシップ　フロム　アマコン」三一七、三一八頁。
(11) これを現在の単位で換算すると一二〇㌔となるが、ボクサーは一〇ピコとしており、換算すると六〇〇キロとなる。（C・R・ボクサー「前掲書」三一八頁）
(12) 村上直次郎訳「前掲」書一六八頁。
(13) 村上直次郎訳「前掲書」一六九頁。なおこの砲弾は十二ポンド（約五・四㌔）であった。（C・R・ボクサー「前掲書」三一八頁）
(14) 村上直次郎訳「前掲書」一四七頁。
(15) 定航船は船幅が広く、三層または四層甲板のカラック型商船で若干の砲を装備、積載量は当初四百ないし六百㌧。後には千二百ないし千六百㌧となり、なかには二千㌧のものもあった。他にガレオン型、ガレオタ型など。なお総司令官（カピタン・モール）はポルトガル国王もしくはインド副王によって任命されたが、間もなくその職は利権として競売されるようになった。「ひと航海するだけで生涯不自由しないほどの財産を容易につくることができた」からである。マカオ誕生のときから一六二三年（元和九年）までの間、総司令官はマカオ長官を兼ねていた。（C・R・ボクサー「前掲書」八頁から十四頁）
(16) 定航船が就航しなかったのは一五七三年（途中遭難）八二年、八七年、八九年、九二年、九四年、九七年、九九年、一六〇一年、〇三年（オランダ側に捕えられた）、〇七年、〇八年、一〇年、一三年、一六年、二二年、二七年。
(17) デュアルテ・デ・ガマは一五五〇年から五五年までの間毎年来航し、五一年には豊後に入港、ザビエル師は彼の船で日本を離れた。しかし、五一、五二、五三年を除き、デ・ガマの来航については疑問がある。

二

一五五六年（弘治二年）七月の初め、総司令官ドン・アントニオ・マスカレニャスが府内に来航、同船にはインド管区長ベルショール・ヌーネス師が乗船していた。同師はインド副王ドン・アフォンソ・デ・ノローニャ[1]が大友義鎮からの書翰を読んでいるところに偶然めぐり会い「何をしているのか、日本ではこんなにも多くの収穫があるのに、あなたはどうしてあそこへ行かないのか、と言った」[2]という。かねて日本の教会を増援したいと考えていたところに副王から日本への渡航許可が与えられたのである。かくて一五五四年（天文二十三年）五月「ガスパル・ヴィレラ師と四人の修道士、すなわちルイス・フロイス、アントニオ・ディアス、エステヴアン・ゴイス、ベルショール・ディアスおよび五人の孤児」[3]を伴ってゴアを出発したのである。同師が来日の途中、マラッカからポルトガルにおくった書簡[4]には「豊後の府内にはパードレ・バルテザール・ガゴ在り、かの地方教化の鍵は同市にあり。豊後の王は大いにわが教えを好み、自らキリシタンとならんとする意あれど、当面二人の王子の改宗を期待するものなり[5]。部下の大身中数人の帰依するを待たざればその国に異変あらんことを懸念せり」と来日の意図を明らかにしていることに注目したい。

それでは当時府内での教勢はどうであったろうか。ガゴ司祭によると豊後のキリシタンは「貧窮にして現世の物資を有せずわづかに生計を営める者は善人にして教に帰依すれども、上流の士にして富を有する者は現世に執着を有せり、身分高き者数人帰依せばかくのごとき人々もまた教へを奉ずべきことを我等の主において期待す[6]」という状態であった。そこで教勢拡張のためには「二人の王子」という大友氏の「身分高き者」の帰依が必要であり、そのため上位聖職者であるインド管区長の豊後来訪となったのであろう。しかし豊後では「我等到着の十五日前に王は火と武器をもって叛逆の嫌疑ある大身等を攻め、十三人の大身の家を焼き、家族および家臣を滅ぼしたり。この大身等の殺されたるため王は府内より七レグワの山に逃れ、今もなお同所にあり[7]」加えてベルショール師自身、三カ月間日々悪寒と発熱に苦しみ、死もまたまぬがれがたいほどであったから「豊後のキリシタンは一般に貧窮なるが、パードレ等の救恤によりて健康を得、また洗礼を受けて救はるるを見る[8]」にとどま

り、肝心の「二人の王子」の帰依を見るまでにはいたらなかった。

この頃の義鎮のキリスト教に対する心情はどうであったろうか、ベルショール師とともにインド副王の使節として謁見したフェルナン・メンデス・ピントは次のように述べている。(9)

「ベルショール師の再三にわたる改宗のすすめについて、義鎮は立派な言葉と調子のよい言辞で答えるだけで肝心のことについては決断を下そうとせず、さらに二カ月半経ってからも、ときどき言い訳をしながらいくばくかの期待をもたせるに過ぎなかったので、インドに帰ることにした」と。ここには義鎮の優柔不断な逃げの姿勢だけがうかがわれる。

すでに三年前に一万田、宗像、服部氏ら大身の反逆があり、今また小原、佐伯、本庄、中村、賀来氏ら十三人の大身の謀叛をかろうじて鎮圧するなど二十代後半の義鎮にとっては豊後・肥後両国の守護職として政権の確立を図ることが何よりも先決問題であったから、まず足もとを強化しておかねばならなかったのである。したがってこのような多事多難なときに自己の改宗についてベルショール師にはっきりした態度をとりえなかったであろうことは容易に理解できる。しかしベルショール師にしてみれば、サビエル師の義鎮謁見以後すでに布教許可が与えられて、領内には千五百人のキリシタンがおり、(10)アルメイダ修道士の福祉・医療事業がはじめられているおりから、(11)改宗に対する義鎮の消極的な態度は不可解であったにちがいない。

このようにベルショール師が期待していた目的は達成されず、同師は七月から十一月までの間府内とその周辺を視察ののち佐賀関を出帆、マカオ経由で一五五七年（弘治三年）二月十七日ゴアに帰着したのである。

マスカレニャスが府内に来航した一五五六年（弘治二年）にはギュレルメ・ペレイラが平戸に来航、翌一五五七年（弘治三年）にもまたフランシスコ・マルティンスが平戸に来航している。これは豊後における政情不安をみこしてのことではなかったろうか。マルティンスは初代総司令官であり、同時にマカオ長官であった。

一体ポルトガル人がマカオに住むようになったのは一五五五年（弘治元年）頃とされているが、その後日本との貿易の発展につれて人口が急激に増加し、一五六二年（永禄五年）には八百名ものポルトガル人が定住していたという。南支那の貿易港

としてマカオは日本からの銀と支那の絹を貿易品とし、その盛衰は、ポルトガルによる日本との貿易に全面的に依存していた。(12)

さて豊後へは一五五八年（永禄元年）および一五五九年（永禄二年）にはギュレルメ・ペレイラが、また翌一五六〇年（永禄三年）にはマメエル・デ・メンドンサが来航している。なおこれと平行して五八年にはレオネル・デ・ソウザが平戸へ、さらに翌年にはルイ・バレトーが総司令官として平戸に来航しており、またつぎの年にはフェルナン・デ・ソウザが平戸に来航し、殺害されている。

平戸はすでに一五五〇年（天文十九年）のザビエル師来訪のおりポルトガル船一艘が二カ月前より滞在し積荷をしていて、一行は歓待を受けており、(13)以上のことから一五五〇年代の五、六年間は府内と平戸とがポルトガル船のターミナルであったことがうかがえるのである。

さて以上四回にわたるポルトガル船の豊後来航の際どのようなかたちで貿易が行なわれていたであろうか。ここにアルメイダ修道士と大友義鎮が登場してくるのである。

註（1）ヴィッキ編「前掲書」一三五頁。

（2）松田・川崎訳「前掲書」一四七頁。

（3）松田・川崎訳「前掲書」一四七頁。

（4）村上直次郎訳「イエズス会士日本通信上」六三頁から六五頁まで。

（5）ヴィッキ編「前掲書」一三五頁には傍点の部分がみえ、（4）の訳文にはこれがかけている。なお「二人の王子（プリンシペス）」とあるのは「二人の王女（プリンセザス）」とすべきで、原文の間違いではなかろうか。義統には後に土佐の一条兼定に嫁し、清田鎮忠と再婚した長姉と久我三休に嫁した次姉の二人がいた。後に授洗したジュスタとテクラである。

（6）村上直次郎訳「前掲書」九七、九八頁。

（7）弘治二年（一五五六年）小原鑑元以下十三人の重臣がそむいて亡ぼされた。この時義鎮は臼杵に難をのがれた。（「大分の歴史

(4)」一四一、一五五頁。

(8) 村上直次郎訳「前掲書」一七八頁。

(9) 岡村訳「メンデス・ピント東洋遍歴記3」二六〇、二六一頁。なおヴィッキ編「前掲書」一四〇頁から一五五頁に、一五五四年十二月五日付マラッカ発信のピント修練士の書翰がみえ、日本については、堺、宮島、坂東についてふれている。彼は四度日本を訪れた」とされている。

(10) 村上直次郎訳「前掲書」九五頁。

(11) 村上直次郎訳「前掲書」七四、一七七、一八八、一九一、二五六頁。

(12) 松田毅一著「黄金のゴア盛衰記」

(13) 村上直次郎訳「前掲書」一九頁。

三

アルメイダ修道士は一五二五年（大永五年）リスボンに生れ、一五四六年（天文十五年）ポルトガル国王から外科医の免許を与えられたのち、一五五〇年（天文十九年）にはマラッカに向けてリスボンを出帆した。そして一五五二年（天文二十一年）にはじめて来日、山口にトルレス司祭を訪ね、また船にのって二年間ランパカウとマラッカ間の貿易に従事し、一五五五年（弘治元年）平戸入港のディオゴ・デ・アラゴンの船で再度来日、翌年府内でトルレス司祭により、イエズス会に迎え入れられた。[1]その際五千クルザドが寄進されたが、これはその後マカオと日本の間の貿易資金として活用され、日本イエズス会の諸経費にあてられるとともに日本人キリシタンに対する医療活動に生かされたのである。[2]

一五五七年（弘治三年）アルメイダ修道士は府内に病院を開設し、盛況をみたが、一五六〇年（永禄三年）にはイエズス会総会長の命令によって、イエズス会士の医学教授や施術が禁止されるにいたったので、彼は「生ける車輪」となって布教に専

念、「不断の巡礼行」ともいうべき生涯を辿り、一五七九年（天正七年）マカオで敍階されて日本に帰り、一五八三年（天正十一年）天草で死去する。[3]

アルメイダ修道士による五千クルザドのうち、いつ、いくらの額が投資されたか、明らかでないが、その最初のものは、彼がイエズス会に入ったとき、すなわちドン・フランシスコ・マスカレニヤスの船が府内来航のときではなかったろうか。そしてその後三回にわたるポルトガル船の豊後来航の折にも同じようにイエズス会士として貿易に参加したであろう。彼はユダヤ教から改宗した貿易商人であったから、貿易や金融の実務に精通していたであろうことは疑問の余地がない。このようにして日本におけるイエズス会の財政的基礎が確立されたわけである。

なお、一五六一年（永禄四年）にはアフォンソ・ヴアスが薩摩に入港、またフェルナン・デ・ソウザが平戸に入港、さらに翌年ペロ・バレトー・ロリムが横瀬浦に入港した。そのいずれの入港の際にもアルメイダ修道士が出むいているところから、そこでポルトガル人達の告解をきき、地域での布教に従事したであろうが、加えて貿易にもあたっていたのではあるまいか。同修道士が貿易をはじめてから約十余年後の一五七〇年（元亀元年）頃には当初資本の四倍位の蓄積ができていた。[4]

イエズス会では一五六三年（永禄六年）財務担当（プロクラドール）の制度を設け、初代財務担当にミゲル・ヴアス修道士をあて、同修道士は十九年間その職にあったのち、ジョアン・デ・クラスト司祭がその後をついだ。これは在日イエズス会士の増加[5]につれて、所要経費が増加し[6]、財務担当の職がさらに重要になってきたからである。巡察使ヴアリニャーノは、一五七九年マカオ市と協定を結び、毎年絹五十ピコをイエズス会のための特別ワクとした。[7]これは公認のものであるがこれとは別にイエズス会士個人が関係地域の領主から委託をうけて、やむを得ず貿易に参加するいわば非公認のものとがあった。その例として大友義鎮の場合入信（天正六年）以前、三千ドウカドが投資されている。[8]入信以後も投資は続けられたはずで、その間アルメイダ修道士から必要なアドヴアイスがおくられていたにちがいない。[9]

ポルトガル人の日本進出は「キリスト教と銀」[10]の問題として総括されているが、イエズス会にとって後になって批判される

にいたったマカオ貿易と大友義鎮の一側面をそこにみることができるのである。

註

(1) シュッテ編「前掲書」三八、四二、七六、八九頁。ヴィッキ編四四八、五一二頁。

(2) 村上直次郎訳「前掲書」一七七、一九一、二五六頁。

(3) シュッテ編「前掲書」三九六頁。

(4) 高瀬弘一郎著「キリシタン時代の研究」五八三頁。

(5) 一五四九年ザビエル師のほか五名であったが逐年増加し、一五八一年十二月には七十四名となり、一五八七年一月百十一名、一五九〇年百四十名で一六一四年の慶長十九年大追放のとき百十五名であった。なおイエズス会には会士の布教や生活面で補助をする役割の同宿、看坊、小者とよばれる日本人がおり、その数も逐年増加し十七世紀の初めには九百名に達していた。(シュッテ編「イントロダクテイオ・アド・ヒストリアム・ソシエタティス・エス・イン・ヤポニヤ一五四九―一六五〇」三七九、三八〇頁。)

(6) ヴァリニャーノ「松田毅一他訳「日本巡察記」第二七、二八、二九章。なお高瀬弘一郎著「前掲書」二一四頁から二一七頁まで。

(7) ヴァリニャーノ「前掲書」一四一頁から一四二頁まで、高瀬弘一郎著「前掲書」三四七頁。

(8) 高瀬弘一郎著「前掲書」五五四頁。

(9) トルレス司祭の死後、日本布教長の職をついだフランシスコ・カブラル司祭は、一五七一年九月二日付長崎発、総会長宛て書翰のなかで、アルメイダが入会して貿易を開始して後、日本布教の創始者達の時代の福音的清貧が破壊され、修道会の戒規が弛緩してしまった、ときびしい貿易批判を行っており、イエズス会士の個人的な商業活動に対しては、総会長が禁止措置をとるよう要求している。(高瀬弘一郎著「前掲書」三三四、六二一頁。)

(10) C・R・ボクサー「前掲書」一頁。

結び

大友義鎮は、天文十九年（一五五〇年）父義鑑死去により、豊後・肥後両国守護職に任ぜられ、天文二十三年（一五五四年）には肥前の、続いて永禄二年（一五五九年）豊前・筑前・筑後国の守護職となり、九州の北半分を領有するにいたったが、この間、最大の敵としたのは中国の毛利氏であった。毛利氏との戦いは弘治三年（一五五七年）舎弟大内義長が毛利元就に討たれて以後、元亀元年（一五七〇年）に和睦が成立し、豊筑から撤兵するまでの約十三年間にわたっている。この間に「硝石と大砲」の問題があったし、莫大な戦費調達の問題があった。一般に領主は「公役として家臣の奉仕をうけるので、何も買わなくて済んでいた」(1)にせよ長期間にわたる動員にあたって、財政上の強固な措置を欠かせなかったことはいうまでないところであって、そのための対策は不可欠であった。

一方この間における義鎮の信仰についてみると、弘治二年（一五五六年）には京都大徳寺に瑞峰院を建立寄進、永禄五年（一五六二年）には入道して宗麟と号し、永禄十二年（一五六九年）から翌元亀元年にかけては臼杵に寿林寺の建立をすすめるなど禅宗に傾倒していた。さきにも述べたように全日本の布教長として、豊後府内にいたトルレス司祭が肥前に去り、後任のフランシスコ・カブラル司祭が一五七〇年（元亀元年）豊後に赴任するまでに八年間という時の流れがあった。義鎮はこれより八年後の一五七八年（天正六年）日向出陣に先立って受洗することになるのであるが、弘治・永禄の頃の義鎮にとっては改宗のことは棚上げして、専らアルメイダ修道士の「情報と行動力」を利用しながらマカオ貿易への参加があった。そこに当時の義鎮の「実像」をみることができるのではあるまいか。

（1）　ヴァリニャーノ前掲書一八六頁。

（県史編さん室嘱託　大分市上野六坊町四組）